

序

山影 進

本書は、文部省の科学研究費補助金による重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の領域B02「地域関連の論理」に属す「東南アジア地域体系の形成と周辺地域の関与」班の中間報告である。

この研究班の研究目的は、東南アジアに焦点を合わせつつ、地域が地域としての特徴を形成・維持・変更していく過程を、その地域自体の力学と周辺地域の関与とを相互に関連させて分析することにより、マクロな視点から総合的地域研究の手法確立に寄与することである。

そもそも、いかなる地域も、一つの世界に組み込まれている部分であり、そこには部分としての域外依存性ととともに、その地域が全体の中で周辺と区別できる一つの部分として浮かび上がってくる何らかの固有性を有しているはずである。この世界の中の地域、システムの中のサブシステムとしての東南アジアを見る立場の確立を、本共同研究はめざしている。ある特定の地域とその周辺地域との連関を解明することは、その地域の内部に焦点を当てるミクロな視点からの地域研究を補完するだけでない。一層重要な点として、それはその地域が地域として存在する背景、あるいは原因さえも探り当てることである。この二重の意味で、地域関連の論理の分析は、総合的地域研究には欠かせないアプローチの一つである。

東南アジアは、世界の諸地域の中で、地域関連の研究対象として理想的な特徴を備えている。古来より、インド・中国の文明の影響を拮抗的に受けつつ、それなりの地域として外部から認識され、また東南アジアを一つの場とする体系も存在してきた。近代には、イスラムやヨーロッパの文明との間で複雑な相互作用を展開してきた。第二次世界大戦後には、国際政治経済の文脈で、東南アジアは独自の歴史的展開をたどるとともに、米国、中国、日本から様々な影響を受けてきた。この歴史の中に東南アジア性は位置づけられる。

すなわち、東南アジアの東南アジア的特質は、東南アジア基層文化の上に、さまざまな外界からの上皮がかぶさっていったのではなく、外界との接触をつうじて東南アジアなるものが形成されていた、というのが本共同研究の基本的な前提である。

ところで、東南アジアは、たとえばヨーロッパと比較して、まとまりのない地域、実体的な地域、名前だけの地域、地域とよべない地域、など蔑視とも思える表現で、その地域性を否定されてきた。しかし近年、東南アジアの自律性、東南アジアにおける自律的歴史、世界システムとしての東南アジア、固有な論理を持つ東南アジアなど、東南アジアという空間が持つまとまり、そこに住む人々が持つ共通性に注目する議論が興隆している。

このように対角線的に対立する東南アジアの見方に対し、第3の視点を提示しようとする問題意識が本共同研究の背景にある。すなわち、地域の特性を、域外に対する自律性・独立性・独自性ではなく、周辺との関わり合いの中、つまり地域連関の論理の中に見出そうとする。本書は、各共同研究者の得意な分野における地域関連性、専門の領域から見た地域連関の論理を全面に出した中間報告である。そして筆者を含む六人の研究者の報告を大概対象年代順に並べてある。

地域連関の論理というと、東南アジアという地域とその周辺の諸地域の存在を前提にし、両者間の関係の論理を意味するように受け取られるかも知れない。しかし、東南アジアというまとまりと周辺地域というまとまりとの関連が地域連関ではない。東南アジアを包含する広域世界の中に埋め込まれた関係やネットワークの中に、東南アジアとその周辺とが別々のものとして認識できるような構造が存在している状態が地域連関である。地域連関の論理は、広域世界を対象にし、その対象の部分として地域像が現れ、確立し、さらには変容していく（そして場合によっては消滅していく）過程を広く覆い得る。その意味で、地域的ネットワーク研究の延長上に地域連関研究を位置づけることができる。

地域をネットワークのような関係性からとらえる地域認識方法論に関しては、既に筆者は「地域にとって地域研究者とは何か」『政治学年報1986』（岩波書店、1988）や『「地域」の語り口 東南アジア像を通して見る認識方法』『社会科学の方法 VII 政治空間の変容』（岩波書店、1993）で議論している。本共同研究の実施に際しては、そこで提示しているような方法論に明示的にしたがうことを研究の出発点にしなかった。しかし地域連関の論理を解明するにあたっては、自ずと、東南アジア対周辺地域という所与の存在間の関連を分析するのではなく、広域世界の中に東南アジア的なものと域外的なものとの関係を浮かび上がらせるような共同研究へと進んだ。

以上のような目的意識で1993年から共同研究を進めてきたが、本書は95年夏ま

での分担研究の中間的成果をまとめたものである。不慣れな編集作業に手間取ったり、印刷・配付が諸般の事情で遅くなったりしたが、本書に対する批評を踏まえて最終的な共同研究成果をまとめたい。忌憚ない批判を筆者や各章の執筆者にお寄せいただきたい。

また1996年1月にはこの研究班が企画の中心のひとつとなって、シンポジウム「東南アジア世界の形成と地域連関の論理」が開催された。このシンポジウムの記録は別途刊行される。地域連関の論理を考えるに際し、そちらも参考にしていただけると幸甚である

(1996年5月)